

平成 29 年度

病害虫発生予察情報 第 18 号

長期予報

北海道病害虫防除所 平成 30 年 3 月 26 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区気象台発表の 2 月 23 日付の暖候期予報および 3 月 23 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

北海道地方 3 か月・暖候期予報

(4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 平成 30 年 2 月 23 日

3 か月 平成 30 年 3 月 23 日

札幌管区気象台発表

<気温の各階級の確率(>

4月	20	30	50
5月	20	40	40
6月	20	40	40
6～8月	20	40	40

低い 平年並 高い

<降水量の各階級の確率(>

[北海道日本海側・北海道オホーツク海側]

4月	30	30	40
5月	30	30	40
6月	30	40	30
6～8月	30	30	40

[北海道太平洋側]

4月	20	40	40
5月	30	30	40
6月	30	40	30
6～8月	30	30	40

少ない 平年並 多い

春(4月) : 天気は数日の周期で変わりますが、北海道太平洋側では平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率 50% です。降水量は、北海道太平洋側で平年並または多い確率ともに 40% です。

(5月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

夏(6月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに 40% です。

(6月から8月) : 大気全体の温度が高い見込みです。また、太平洋高気圧の北への張り出しが強く、暖かい空気に覆われやすいため、夏の平均気温は平年並か高いでしょう。
夏の降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

上記3か月予報、暖候期予報および近年の発生状況からみた平成30年度の主要病害虫の発生予想は以下のとおりです。なお、病害虫の発生予想は毎月の気象予報にもとづいて修正し、毎月の予報（毎月末頃発表）、注意報として随時発表します。今後はこれらの予察情報を参考にしてください。なお、最盛期や評価時期が暖候期予報の期間から外れている病害虫については、長期予報に掲載していませんので、ご了承願います。

平成30年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		25	26	27	28	29	発生期	発生量
水稻	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	並
	紋枯病(疑似紋枯症を含む)	◎	◎	◎	◎	◎	やや早	やや多
	縞葉枯病	□	△	□	□	□	—	やや多
	ばか苗病	◎	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	△	△	□	□	□	—	やや少
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	やや少
	ニカメイガ	□	△	△	△	△	やや早	少
	ヒメトビウンカ	□	□	□	◎	◎	やや早	やや多
	イネドロオウムシ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	□	△	△	△	△	やや早	やや多
	イネミギワバエ	◎	◎	◎	◎	□	やや早	並
	フタオビコヤガ	□	△	△	△	△	やや早	やや少
秋まき小麦	赤さび病	◎	□	△	△	△	やや早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	やや早	並
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	少
	赤かび病	△	△	△	◎	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	△	△	△	□	□	—	並
	ムギモグリバエ	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	△	□	◎	—	並
	ムギモグリバエ	—	(△)	(△)	△	△	やや早	やや少
大豆	べと病	△	△	△	△	□	並	並
	わい化病	△	△	△	□	□	—	並
	マメシンクイガ	◎	◎	□	□	□	やや早	並
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	◎	△	△	△	やや早	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少
小豆	菌核病	△	△	△	□	□	並	やや少
	灰色かび病	△	△	△	□	◎	並	やや少
	茎疫病	△	△	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	□	△	△	□	やや早	並
菜豆	菌核病	△	△	△	□	□	並	やや少
	灰色かび病	△	△	△	□	△	並	やや少
	黄化病	□	△	□	□	□	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		25	26	27	28	29	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	△	並	並
	軟腐病	□	□	□	◎	◎	－	並
	黒あし病	◎	□	□	◎	◎	－	並
	そうか病	□	□	□	△	△	－	並
	粉状そうか病	□	△	△	□	△	－	並
	アブラムシ類	△	□	◎	△	△	やや早	並
てんさい	褐斑病	△	□	△	□	△	やや早	やや多
	根腐病(黒根病含)	□	△	△	◎	△	－	並
	西部萎黄病	－	－	(□)	(△)	(△)	－	少
	ヨトウガ (第1回)	◎	◎	△	△	△	やや早	やや少
	ヨトウガ (第2回)	◎	◎	△	△	△	やや早	やや少
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	△	△	△	やや早	並
	軟腐病	△	△	△	◎	□	－	並
	乾腐病	□	□	△	△	△	－	並
	タマネギバエ(タネバエを含む)	△	△	△	△	△	－	やや少
	ネギアザミウマ	△	◎	◎	◎	△	やや早	やや多
	ネギハモグリバエ	－	－	－	(△)	(△)	やや早	少
だいこん	軟腐病	◎	△	□	◎	△	－	並
	キスジトビハムシ	□	△	△	△	△	－	並
あぶらな科 野菜	コナガ	△	△	△	△	△	－	やや多
	ヨトウガ	△	□	△	△	△	やや早	並
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	並	やや少
	黒星病	△	◎	◎	◎	◎	やや早	多
	斑点落葉病	△	◎	◎	◎	◎	やや早	やや多
	腐らん病	□	□	◎	◎	◎	－	多
	ハマキムシ類	△	◎	△	△	△	やや早	並
	モモシンクイガ	△	◎	◎	△	△	やや早	並
	ハダニ類	◎	△	△	△	△	やや早	並
	キンモンホソガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少

平成 30 年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病および疑似紋枯症

近年、道内では夏季の高温により本病の多発傾向が続いている。平成 30 年は夏季の気温が平年よりやや高いと予報されており、本病の発生に注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に病斑が止葉葉しょうまで達している株が散見されたような水田では、本病に効果が認められる薬剤の箱施用、水面施用、出穂 20 日前と出穂期の 2 回の茎葉散布など、いずれかの薬剤防除を実施する。

また、近年本病と症状の類似した疑似紋枯症（赤色菌核病・褐色菌核病）の発生が各地で認められている。特に、赤色菌核病は多発すると被害を及ぼす場合があるので、前年に赤色菌核病の病斑が止葉葉しょうまで達している株が散見されたような水田では、赤色菌核病に登録のある薬剤の箱施用あるいは水面施用による防除を実施する。

2. 水稻の縞葉枯病

平成 29 年は、全道の縞葉枯病の発生面積は平年並であったが、局所的に発生の多い地域が認められ、伝染源が多いと推測される。本年は夏季の気温が平年よりやや高いと予報されていることから、媒介虫であるヒメトビウンカの活動もやや活発になるものと予想されるため、本病の常発する地域や前年の発生が多かった地域ではヒメトビウンカの防除を実施する。

3. 水稻のヒメトビウンカ

平成 29 年は、ヒメトビウンカの発生面積は平年を上回った。また、並温少雨に経過した 8 月に発生量の増加を認めた地域もあり、越冬幼虫の密度はやや高いものと推察される。平成 30 年は春季から気温が平年並か高いと予報されていることから、イネ縞葉枯病の媒介に関与する越冬世代の発生が多く、活動も活発化することが予想される。イネ縞葉枯病発生量の多い地域では、ウイルス媒介を防ぐための防除を励行する。

4. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

平成 30 年は夏の気温が平年並か高いと予報されている。7～8 月が高温に経過すると、畦畔などの発生源における 2 回目幼虫および成虫の密度上昇を助長し、水田内への侵入や 3 回目幼虫・成虫による稲穂への加害活動も活発化することから、被害が増加する。一方、発生を抑制する降雨の量は平年並と予報されている。以上のことから、発生量はやや多いと予想される。基幹防除実施後は、気温・降水量や水田内のカメムシ密度に注意して防除の要否を判断する。

5. 小麦の赤さび病

平成 30 年は 6 月まで気温がやや高いと予報されており、本病の発生にやや好適な条件が予想される。主要品種「きたほなみ」は抵抗性“やや強”であるものの、近年多発生となる場合がみられている。そのため「きたほなみ」においても、止葉抽出期までに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出期から穂孕期に薬剤散布を行う。

6. てんさいの褐斑病

本病は 7～8 月が高温多湿な年に発生が多く、平成 30 年は夏季の降水量は平年並であるものの、気温がやや高い予報であることから、本病の発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、DMI 剤およびカスガイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、混合剤も含めてこれらの剤の使用を可能な限り低減する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤と銅剤を基幹とし、散布開始は初発期までに行う、散布間隔は 14 日以内とすることを遵守する。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”品種の導入）に積極的に取り組む。

7. たまねぎのネギアザミウマ

本種は高温少雨で発生が多くなる。平成 30 年は夏季の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予報されており、発生量は平年よりやや多くなると予想される。本種は合成ピレスロイド剤に抵抗性の個体が広く確認されており、防除にあたっては同系薬剤の防除効果は明らかに低下していることから、防除ガイドを参考に他系統薬剤の組合せによる防除を行う。

8. あぶらな科野菜のコナガ

平成 30 年は夏季が本種の増殖に好適な高温に経過すると予報されており、本種の発生がやや多くなると予想される。そのため、発生経過には注意が必要である。平成 25 年以降、コナガを含む鱗翅目害虫に対する卓効剤であったジアミド系薬剤抵抗性個体が確認されている。また、道内においてもジアミド系薬剤を多用すると当年中にその防除効果が低下することが確認されている。防除にあたっては、異なる系統によるローテーション防除を行うとともに、防除実施後の効果確認、防除効果が得られていない場合の他系統薬剤による防除実施を心がける。

9. りんごの黒星病

本病は、ほとんど発生を見ない年が続いていたが、平成 28 年以降一般園においても被害が発生している。平成 30 年は春季から夏季の降水量が平年並と予報されているが、感染源となるり病葉や芽での越冬菌が多く残っていると推察されるので、平年より多い発生が予想される。薬剤の希釈倍数や散布水量に気をつけて丁寧に散布を行う。重点防除期（開花直前から落花期）はもちろんのこと、それ以降も本病に対する薬剤散布は間隔が開きすぎないように行う。また、耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しないようにする。

10. りんごの斑点落葉病

近年、本病に感受性のデリシャス系品種が栽培されている渡島、留萌地方において多発傾向が続いている。平成 30 年は夏季の気温がやや高いと予報されており、平年よりやや多い発生が予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。

11. りんごの腐らん病

近年、本病の多発傾向が続いていることにより伝染源密度は高く、平成 30 年も発生量が多くなることが予想される。病患部からは冬期間を除きほぼ通年孢子が分散されるため、り病枝の切り落としおよび病患部の削り取りを行い、切り取った枝や削り取った樹皮は必ず園外に持ち出して適切に処分する。夏季になるとり病部が見分けづらくなるため、注意する。病原菌は主に傷口を侵入門戸とするため、樹体の損傷を抑える栽培管理を行うことはもちろんのこと、削り取った傷口、せん定などによってできた切り口には殺菌剤を含んだゆ合剤を塗布するとともに薬剤散布も行い、本病に感染しないよう管理する。